
双子の兄が歩く道～ネギま！～

十六夜哀音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子の兄が歩く道～ネギま～

【Zコード】

Z6336Z

【作者名】

十六夜哀音

【あらすじ】

ネギま好きだった俺はいつの間にか転生していた・・・
死んだ記憶はないし、テンプレした記憶も無い。だっていうのに赤ん坊！？

もう一人の赤ん坊は・・・ネギ・スプリングフィールド？

どうやら俺は双子の兄だそうだ・・・何故兄がネギじやない！！！

似非敬語で素を隠しながらネギま！を辿る？物語が今始まる・・・
この物語は残酷な表現・アンチ？・ガールズラブ？等が含まれる可能性がありますのでご注意下さい。

尚、更新は不定期・PCからの閲覧を推奨します。

1歩目へイギリス・とある山奥の村・ウホールズ・メルティアナ魔法学校を歩く

1歩目は前作と同じです。

改行を増やしてみたのですがいかがでしょうか？

初めて読んでくださる方はこのままお読みいただけると嬉しいです。

田の前に広がるのは闇夜を染める紅蓮の炎と灰色の塊が多数。

辺りを炎に包んだ元凶は既に田の前にいる男に殲滅された。

地に倒れて足を失っているが出血はなく、その失った部分が灰色に染まつた女の前に俺ともう1人の子供が守るように立ちはだかる。

俺と子供の田の前には元凶を殲滅した男がロープを身にまとい、大きな杖を持って立っていた。

その男は俺たちの方へと動き出す。

「お前達・・・そつかお前達が・・・お姉ちゃんを守つているつもりか？」

もう一人の子供・・・弟は初心者用の杖を掲げるも、近づく男に恐怖して肩を震わせて目を瞑る。

俺はそんな弟の前に立ち、両手を広げた。

そう知つていれば怖くない。男の手がこちらに伸びても怖がることもない、その手は俺と弟の頭の上に乗せられる手なのだから。

「大きくなつたな・・・お、そつだお前達に・・・」の杖をやわらぐ。
俺の形見だ・・・一本しかねえけどな・・・」

そう言つて、頭を撫でた男は俺にその杖を手渡すが、それを受け取

つた俺はすぐに弟へと杖を手渡した。

「お父さん・・・?」

そんな男の姿に弟は眩くが、俺から手渡された杖が重かつたのだろうバランスを崩す。

「もう時間が無い・・・ネカネは大丈夫だ、石化は止めておいた。後はゆづくら治してもいい。悪いな、お前達には何もしてやれなくて・・・」

男はそう言しながら空に浮かぶ。

「・・・お父さん?」

「！」などと言えた義理じやねえが・・・元気に育て、幸せにな!」

彼は何を想つて此処に来たのか、どんな想いで此処から去らなくてはいけないのか俺にはまだわからない。

そして飛び去る男の背中を「お父さん!」と叫び続けながら地を走る弟の背を俺はこの目に焼き付けた。

「卒業証書授与・・・この七年間よくがんばってきた!だが、これから修行が本番だ。気を抜くではないぞ・・・ネギ・スプリングフィールド君!」

「ハイ！」

ここはメルティアナ魔法学校。今俺の目の前では卒業式が行われている。

今名前を呼ばれたのは俺の弟であるネギ・スプリングフィールドである。

そして、彼を弟と呼べる俺はアルク・スプリングフィールド、つまりはネギの双子の兄である。

何故双子の兄なのに、ネギの名前が俺の名前になつていないのか不明ではあるが、推察するに俺がイレギュラー転生者チートであることが原因ではないかと考えている。

俺は自称『転生者』である。何故自称かととわれれば、テンプレートのように神様の失敗で死んだ。好きな世界に転生させてあげる上に君の欲しい理解不能能力をプレゼントしよう！などといった記憶が一切ないのである。

要するに、現前世で眠りに落ちて目を覚ませば魔法先生ネギま！の世界へと紛れ込んでしまっていたのである。

紛れ込んだといつても、主人公の兄として生まれてしまったのだが・

『現実』の記憶を持つているが、『物語』の中に存在する身体であるアルク・スプリングフィールドが寝ても覚めても、ネギが主役の世界に居続ける、夢現実に居らないから覚めないのであれば自身を『転生者』と表現してもおかしくはないであろう。

さて、よくあるテンプレ的なワンシーンの記憶が無いことから俺自身に『理解不能能力』はほぼ無いのではないかと考えているが、ネギの双子の兄であることから彼の『千の呪文の魔法使い』と『災厄の魔女』の子であるとも言え、魔力総量は弟と同程度の可能性がある。

更にはこの七年間で、弟と禁書庫に籠ることで『雷の暴風』のような中級魔法いくつかをなんとか使えるようになってしまった辺り、弟と同程度の頭脳や開発力を持つていると考えられる。

そのせいだと思うが『現実』の頃とくらべるとかなり物覚えがよかつたりもする。因みにいくつかの上級魔法も使えはしないが覚えてはいる。

これらのことから、俺が持つであろう『理解不能能力』を強いて上げるのであれば『物語』の知識とネギと同程度の『才能』ではないかと考えている。

因みに『現実』ではそんなに料理をしなかつたのに、この歳でかなり美味しい料理が作れるし、家事等もなんなくこなせる。ナイフ投擲・ある程度の体術が使えるようになつていていたりもした。

これらは『理解不能能力』の一端の可能性もあるが、それは定かではない。

どことなくそんな人物を『現実』の別の物語で見たことがあるような気もするのだが・・・

そんなことを考えていると不意に名前を呼ばれていることに気づく。

「・・・ク君・・・アルク君ーアルク・スプリングフィールド君ー！」

「・・・ハイ？」

「全く、君はまた考え方をしていたのかね？卒業式だとこうのに変わらぬこのう・・・」

その言葉にふと、周囲を見ると隣にいるアーニャは溜息を吐き、ネギはあわあわと慌てた表情でこりりを見ていた。

どうやら校長に向度も名前を呼ばれていたらしく。

考え事をしてこむといひても周囲の音が脳に入つてこなくなつてしまつのは悪い癖である。

卒業式といつ長いよつで短い時間にそんなことなど考えなければいいのではあるが・・・

みうせく俺は校長の前に立ち、差し出された卒業証書を受け取った。そして、俺達の卒業式は終わりを迎えた。

ネギ・アーニャと共に廊下へ出るとネカネ姉さんが待っていた。

卒業証書に浮かび上がる修行の地の確認である。

アーニャはロンドンで占て師、ネギは日本で先生をすることであつ。

恐らくは俺も『英雄の息子』といつぱのネームバリューを持つていることから日本で先生をすることが修行内容として卒業証書に浮かび上がるであれ。

「ネギ、アルク2人共何でかいであつた？私はロンドンで古い師よ

案の定アーニャはロンドンで古い師であった。

「今浮かび上ると…・・・ね？」

ネギがアーニャに答えると、卒業証書に文字が浮かび上がっているところだった。

俺も卒業証書を見ると文字が浮かび上がつてくる。

『 A T E A C H E R H N J A P A N (日本で先生をする)』

それと同時にネカネさんとアーニャ2人の「ええ～～～～～～～～～～～～～！」絶叫が廊下に響き渡る。

そして丁度前にいた校長に直訴を始めるネカネさんとアーニャ

「何かのマチガイではないのですか？10歳で先生など無理です」

「やつよネギつたらただでさえチビでボケで・・・

確かにどう足搔いても年齢的にアウトだが、修行は修行だし麻帆良ならなんとかなるだろ？というか何とかなつてしまつと思いつつ

「ああ、ネギも日本で先生をすることだつたんだ。私も日本で先生をするのが修行内容みたいだ・・・もしかしたら一緒に場所で修行するのかもしないね」

と俺が発言するとネカネさんとアーニャが若干だが大人しくなつた。前述にもある通り、俺は覚えもないのに何故か家事全般ができるので若干安心したのだろう。

まあ中身が『一子供におじさんと呼ばれる年齢《ハタチ過ぎ》』 + の年齢なのだからできないこともない。

ただし年齢相応の身長・身体能力なので、稀にできないこともあるが。例えば、身長が足りなくて洗濯物が干せなかつたりすることかだ。

魔法を使えば出来ることはあるだらうが、修行先では魔法を秘匿して生活しなくてはならないので自身の身体のみで臨む必要性があるだらう。

そんなこともあるがある程度は家事ができるし歳の割に落ち着いているので、ネカネさんやアーニャからは特に心配されることもない。

実際は、あまりにも落ち着きすぎていて心配されているかもしれないが、肉体年齢に精神が引っ張られているかの『ことく稀にわがままを言つてしまつ』こともあった。

しかしながら、落ち着いているとは言えども肉体年齢は9歳であることには変わりはないので尙も校長に無理だと主張を続ける2人が

居た。

「卒業証書にそうかいてあるのなら決まりたことじや。『立派な魔法使い』になるためにはがんばって修行していくしかないのつ」

ネカネさんとアーニャの直訴も虚しく、校長からその言葉が出るとネカネさんが立ちくらみを起こして倒れてしまった。

そして

「安心せい、修行先の学園長はワシの友人じやからの。ま、がんばりなさい」

と言つ言葉が続いた。

その言葉に元気に「ハイ！わかりました！」返事をするネギと唖然として立つてているだけのアーニャ、そして倒れたネカネさん。

そんな光景が俺の目の前に広がつていた。

ネカネさんも大変だなあ・・・等と思いつつもネカネさんを介抱する俺であった。

そして卒業から数ヶ月間ネギと共に日本へ行くための準備、日本語の勉強をしていた。

今は『転生者』である俺が日本語をネギに教える立場ではあるが、実は魔法学校での成績はネギの方が上である。

と言つのも、座学の成績は兄弟とともにトントンなのであるが、実技の成績は俺がネギの得意とする属性の魔法を使つていたため、ネギ

光・風・雷

が主席で俺が次席という扱いになつてゐる。

俺の得意属性は闇・氷・水とネギとは正反対でエヴァンジエリンとほぼ一緒に得意属性なのであるが、わざと成績を下げるためにネギの得意属性の魔法を用いてテストに臨んでいた。

これは今後の布石である。

俺は『転生者』であり、本来ならば『物語』には存在しない。

しかしながら、『物語』に『転生者』がいるのであれば何らかの副作用と修正力が働く可能性が考えられる。

そこで、弟の成績優秀さを俺より上に置くことでMM元老院や学園長の目をネギに注目させることにしたのである。

ある種の生贊ではあるが『物語』とほぼ変わらないようにする為なのだから許せ・・・ネギ・・・と思つてしたりもする。

が、結局主席・次席なので優秀な英雄手鞠の息子達として目をつけられているかもしねいが・・・

因みに兄弟仲は良好である。

ネギの千の呪文の魔法使いに対する思い入れは確かに歪んでいるように思えるが、年齢や環境から考査すると致し方ないものであると捉えることができる。

幼き頃から両親が目に見える範囲でおらずに伯(叔)父・伯(叔)母に預けられて生活していれば尚のこと、離れて子供一人で暮らし

てこるところともかなり影響しているだろ？。

そして母代わりに従姉のネカネさんがついていてくれたが、父に代わって叱ってくれる男の人がいなかつた上に、村の人たちがネギに父の面影を見て叱らなかつたことも影響しているであら？。

総じて、幼年期の子の精神を形成するのは周囲の環境であり、大人たちの態度であることからネギの歪みはネギだけの責任ではないと言える。

あまりの歪みっぷりに嫌悪感を抱く人間もいるかもしだれないが、年齢や環境を考慮すれば自ずと受け入れることはできるのではないだろうか？

等とは言つてみるが、特に気にすることがなく会話して父親がどうこうという会話をして『俺』がいるところとを認識せしめてやるだけがいいのだから。

まあ、要するに親含めて大人が悪いんですよ。いくら愛していても、その想いが子に届いていなければ無意味なんだ。

そんなこんなでネギとは普通に兄弟をしていると思つていてる。

そういうえば、ネギはやけに父に執心だが母について気にしているのは何故だら？。

先ほどの考察の如く、ネカネさんが親身になつて面倒を見てくれていたからである？。

そのあたりは追々考えて行くことにしよう。

それとはまた別の要因として、俺が千の呪文の魔法使いになりたいと公言していることも上げられる。

俺自身は『立派な魔法使い』になりたいと思つていらないが、このように公言することで周囲の人間に誤認識させている・・・つもりである。

これのお陰で、ネギも俺が千の呪文の魔法使いのよつた立派な魔法使いになりたいものだと認識してくれて、やりやすい。

そんなわけで、特にコレといった問題も発生せずに兄弟仲良く卒業することが出来たのである。

気がつくと、ネギに出していた日本語の読み書きプリントが終わっていたので、今日の勉強を終えて部屋に戻ることにした。

・・・さて、次は日本での目標を考えよう。

麻帆良到着後のイベントを大きくわけると

- 1・学年末テスト
- 2・桜通りの吸血鬼
- 3・修学旅行
- 4・悪魔襲来
- 5・学園祭
- 6・魔法世界

この6つとなる。

とりわけ原作^{介入}ブレイクをする気は無いが、要所要所、特にエヴァンジェリン一家や大河内さんが関わる部分では積極的に介入するだろ

う。

俺は大河内さん、茶々丸、エヴァンジエリンがすきなんだよ・・・
ハーレムにする気はないけど、好きな人くらい守りたいじゃないか・
・

まあ、俺自身が『転生者』なので、既に『介入』しているのは否め
ないわけだが・・・

方針は基本ネギ任せで俺の知っている『物語』から離れすぎないよ
うにフォローしていくこととする。

好きな人らが巻き込まれるタイプの人なので、もしかしたら俺が主
役の世界になるかもしれない。

その時は、ネギと一緒に俺も成長していくばいいかと考えている。

今想像してもわからないのならば、前を見て先に進めばいいから。

そう結論付けて、俺は明日に備えて眠りに落ちた。

そして翌日、俺とネギはアーニャとネカネさんに見送られてウロー
ルズをあとにした。

懐かしき極東の地、日本にある麻帆良へと旅立つのである。

1歩目～イギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メリディアナ魔法学校を歩く

一読戴き、気に入つていただければ幸いです。

感想・アドバイスありましたら是非。

誤字脱字はチェックしている心算になりやすいので教えていただけ
ると嬉しいです。

5000字～10000字を用意に作成していきたいと思います。

R - 15 ガールズラブ 残酷な描写タグについては自身の物差
と他の方の物差の差を考えて保険としてつけています。

設定小話 1 主人公の名前の由来・・・

ネギはナギの母音を変えただけだったので、アリカの母音を変えて
名前をつけようとしたが、アルカとかアリクとかアリスとか残
念だつたり女の子のような名前ばかり出てきてしまったので、取り
あえず『ア』をつけようと思つたら、アルクという名前になりました。

『ア』をつける アルクだ!という思考回路は意味不明なところが
ありますが、決まつたんらしいかな・・・と。
こんな感じです。

今後幾話かはこんな設定小話なども掲載していく予定ですのでお付
き合いでいただければ嬉しいです。

前作に引き続き読んでくださつた方、ありがとうございます。

初めて読んでいただいた方、初めまして。

これからも、このカキモノにお付き合いいただければ嬉しいです。

2歩目～日本・麻帆良学園都市・麻帆良中等部を歩く～（前書き）

大幅修正2歩目です。

前2歩目は日本到着～歓迎会終了でしたが、
現2歩目は麻帆良行き車両内～学園長室退室までです。

2歩目～日本・麻帆良学園都市・麻帆良中等部を歩く～

早朝に日本に到着し、電車で麻帆良学園都市中央駅を出発す。

何度か乗り継ぎ、埼京線の電車に乗った辺りから学生達の登校時間と重なつたらしく、電車にはどんどん学生が乗り込んできた。

そつこじているうちこ、満員になりギュウギュウと押しつぶされる俺とネギの姿がそこにはあった。

「ネギ、そつちは大丈夫かい？」

「うん、だ、大丈夫だよアルク・・・」

俺は『現実』での経験から平然としていたが、生まれてから今までウェーレズで育つたネギにはキツそうである。

「本当に大丈夫かい？ほら、隙間作ったからこっちにいで。」

本来ならば女性にしてあげることなのだが、ネギがあまりにも不憫なので隙間を作つて入れてやつた。

気がつくと、車両の中が俺達兄弟を除いて少女達ばかりになつていた。

曲がりなりにも俺達は日本人から見ると外国人にあたるので、どうにも好奇の目を向けられてしまつ。

「僕達どこ行くの？ここから先は中学高校だよ？」

少女達は小学生程の身長しかない俺達がどこに行くのか気になる様子でそんな事をたずねて来た。

「いえ、その・・・ハ、ハックショーンー。」

ネギがくしゃみをすると同時にむじ風が巻き起り、スカートがめぐれる。

それと同時に『次は～麻帆良学園～麻帆良学園中央で～』ぞいます』日本の電車特有の鼻声アナウンスが流れる。

このアナウンスを聞くと、嗚呼、日本に帰ってきたな・・・と思えてしまつのは氣のせいだろうか？

しかし、魔法学校時代から魔力の制御について直せと言つてはいるのだが、どうにも直してくれないのは何故だろうか？

電車を降りて、改札から出ると電車内以上に学生の山が見えた。

「わわわ・・・何コレ！？スゴイ人！これが日本の・・・」

「ここは日本の学校の中でも特殊だからね？日本の他の学校も毎朝こんな事になることはない・・・みたいだよ。」

ネギが勘違いしそうだったので訂正しておぐが、理解してくれただろうか？

「あーアルク、僕達も遅刻する時間だよ！？初日から遅れたりまづいし、早く行こう！」

その瞬間、高校生顔負けの速度で走りだすネギの背を田ん、あの日を思い出しながら追いかけた。

ただし、俺は身体強化の魔法を使つていないのでネギのよつなスピードで走ることはできないし、する気もないのであるが。

ちなみに、ネギはリュックを背負つてゐるが『物語』のようにガチャガチャ音がなるようなものは入れさせていない。

父の形見である杖だけはどうしても譲つてもらえず、此方が折れた。他の荷物については友人であるタカミチ宅に届くように既に配達済みなので、後日取りに行くだけである。

やつとネギに追いつくと、赤い髪をツインテールにした少女『神楽坂明日菜』にアイアンクローラーをされていて、その傍らには長い艶やかな黒髪の少女『近衛木乃香』が立っていた。

「ここは麻帆良学園都市の中でも一番奥の方の女子校エリア初等部は前の駅やよ？」

「わ、つまり子供は入つてきちゃいけないの、わかった？」^{ガキ}

「は、放してください～～～

このか、アスナ、ネギである。

どうやら俺のことには気がついていないよつなので、こちらから声を掛けことにした。

「弟が何かしましたでしょうか？したようでしたら私も謝りますので一度弟を放してはくれませんか、御姐さん。」

「あ、アルク！助けて！」

「え？ うわ、子供がもう一人増えてる・・・」

「僕達どないしたん？もしかしてここに何か用事でもあるん？」

「ええ、私とそちらの弟なんですが、本日よりこの学校の英語科教師として赴任してきたアルク・スプリングフィールドと、そちらの御姐さんが頭を掴んでいるのがネギ・スプリングフィールドと申します・・・「え・・・ええー！！！！？」・・・「ホン、学園長室に行きたいのですがどのように行けばいいのでしょうか？」

このかの質問に答えた後、アスナは途中で遮られたが驚くのも無理はないので気にしないことにする。

「ほえー？ じゃあ君と今アスナが掴んでるネギ君がうちが迎えに行く予定やつた新任教師さんなんやなー」

「やうだよーこのか君。」

このかの言葉に答えた声の方を見ると俺達兄弟の友達であるタカミチが来ていた。

「お、おはよーひざわいます！ 高畠先生ー！」

タカミチに挨拶をすると同時にアイアンクローラーを外してネギが落ち

た。意識が落ちた訳ではない。

「久しぶりタカミチー！」

「久しぶりですね、タカミチ・・・いや、高畠先生と言つた方がいいでしようか？」

「・・・！？し、知り合い・・・！？」

「ええ、高畠先生が父の後輩だつたらしく、その繋がりでお世話になります・・・年齢は離れていますけど友人としてもお世話になつていますよ。ハハハ・・・」

「そ、そうなのね・・・つてそんな事より！先生つてビーいうこと！？あんたらみたいなガキンチョがー！！」

アスナにガキンチョ扱いされた俺は若干凹んだ。

「いや、その2人とも頭はいいんだ、安心したまえ。それと今日から僕に代わつて君達2・Aの担任・担任補佐になつてくれるそうだよ」

「そ、そんなあ・・・そつちの子はまだしも、こんな子イヤです。さつきだつて・・・いきなり失恋・・・じゃなくて失礼な言葉を私に・・・」

「いや、でも本当なんですよ」

「本当言つなー！大体あたしはガキがキライなのよーあんたみたいに無神経でチビでマメでミジンコで・・・」

そこまでアスナが言うと、ネギが盛大にくしゃみをしてアスナの制服を吹き飛ばした。

俺はそつと自分の着ていたコートを羽織らせたのであった。

ちなみにアスナは『物語』の通りクマパンを穿いていた。

このかにアスナが着れるものを持って来てもらい、アスナが着替えている間にアスナに何を言ったのかネギに聞いてみると

「あの人失恋の相が出てたから教えてあげたんだけど・・・そしたら何故か怒つてあんなことされたんだよ。」

・・・
「れまた『物語』通りではあるが、やはり育つた環境が悪かったの
であろう、これから俺が正しい方向へと導いてやらないと不味いな

「女性には優しくしなさいってネカネ姉さんに言われただろう？ネギは親切にしたつもりかもしれないけど、女性にとって恋愛にしての悪い結果を教えるのは失礼なことだから次からは気をつけよ

「 そ う な ん だ ． ． ． わ か つ た よ ア ル ク ． ． ． 」

「うーつた事なら素直に言つ」とを聞いてくれるのだが

「それと、魔力の制御はまだできていないのかな？あれも直したほう

がいこと思つんだけど・・・」

「む・・・わかつたわかつた、それもやつておくから・・・」

魔法関係の話をするなどうにも聞き分けが悪い。

「ところで高畠先生、僕達の送った荷物は届いてますか？」

「ああ、おひさんと匂いでいるよ。後で持つていこうか?」

「そうですね、高畠先生の都會が良いのはお願いしたいですね。」

「ハハハ……アルク君、タカミチつて呼んでくれてもいいんだ
けどね……」

「一応先生をやるんですけど、早めに慣れておいた方がいいんですよ。」
「ううのは。・・・そうだネギ、これからはタカミチを見かけても先生をつけて呼ぶんだよ？間違つても生徒達の前、特に学校内では呼び捨てにしちゃダメだよ。」

「うん、次から気をつけるよアルク。」

そこへ着替えたアスナとこのがが戻つて来たのでタカミチと別れて学園長室へと向かつた。

学園長室に入るとねらりひょんがいた。
学園長

『現実』で『物語』を読んでいた時はあまり気にする事よりも無かつたが、実際に田の辺たりにすると『ねりひょん』と言ひ言葉が非常にしつくづくへる。

アスナはアスナですべて困った顔で『ぬらりひょん』を聞いたらしていた。

「学園長先生！ 一体どういとなんですかー？」

「まあまあ、アスナちゃんや・・・なるほど、修行のために日本で学校の先生を・・・そりやまた大変な課題をもらつたのー」

「は、はい、よろしくお願ひします」

今現在、『ぬらりひょん』への対応はネギに任せている。

ここでは、ネギに対応を任せているのは『物語』の通りに進行させたいからである。

ただ、アスナをスルーした上、修行の話をするとは何事かと・・・まあ修行の話だけでは魔法に辿り付くなことではないであろうから問題はなさそうではあるが。

「しかし、まずは教育実習となるかのうへ・今田から3円までじやが・・・もちろんネギ君とアルク君の2人ともじやよ?」

俺もネギも教育実習をする為の日本のカリキュラムは準備期間に受けおいたので抜かりは無い。

「ところでネギ君がアルク君には彼女あるのか?ビーチな?うちは孫娘なぞ」

「ややわらじゅりさん

「ちよ、ちよっと待つてくださいってば！だ、大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！しかもうちの担任だなんて・・・」

確かに日本では、子供が先生をするなどといったことは無いに等しいであろう。

「アスナさん・・・でしたつけ？一応私も弟もオックスフォード大学を卒業していますし、日本で教育実習をする為の単位も取得していますので出来ないということは無いかと思います。労働基準法でしたつけ？それについては調べていないので詳しくはわかりませんけど。」

これは準備期間中に言われたことなのであるが、俺もネギもアーニヤもオックスフォード大学を卒業したことになつていて。

推測するにこの世界では、メルティアナ魔法学校はオックスフォード大学の隠されたカレッジでありメルティアナ魔法学校を卒業した生徒全員が表の世界で有名であるオックスフォードの名前を使い、裏の世界であればメルティアナの名前を使うのである。

もちろん、オックスフォード大学の卒業証書も貰つていて。

あくまで推論であつてもしかしたら、貰つた卒業証書は偽造の可能性も残つているのだが・・・

考えて見ると、偽造の可能性のほうが高いやうな気がしてきたぞ・・・

・？

経歴詐称なんかで捕まつたりしたくないのだが・・・

・・・やつこえせー！」は麻帆良である」とを忘れていた。

アスナがネギや俺のよつな子供が先生をするのはおかしいと思つて
いるのは、麻帆良の認識阻害結界を『魔法完全無効化^{マジックキャンセラー}』で無効化し
ているからではないだろつか。

「・・・君・・・アルク君？ 聞いとるかの？ アルク君や～？」

どうやら呼ばれていたらしい。卒業式の口にも言われたのにこの癖
だけは直らない・・・まあ話の最中に考え方をしなければいいので
あるが、気になるとビビりでも考えてしまつんだ。

俺がこんな状況になるとネギはいつも通りにあわあわした様子で
こちらを見るのだが、このかとアスナはそんな俺の悪癖など知らず
不思議そうな顔をしていた。

「申し訳ないねら・・・学園長。もつー一度伺つてもよひしこでしょ
うか？」

思わずぬらりひょんと顔にかけてしまつた・・・今度から気をつけ
よ。

しかし、どう見てもぬらりひょんにしか見えなくなつて困るんだが・
・ぬらりひょん見たことないのに。

『ぬらりひょん』のコアンスと学園長の雰囲氣でそんな氣になつ
てしまつただから仕方がない。

「う、うむ・・・ネギ君にも言つたが、アルク君・・・この修行は

おそれく大変じや。ダメだつたら故郷に帰らねばならんじ。一度とチヤンスもないがその覚悟はあるかの？」

若干戸惑い気味に覚悟を訊ねられたが、元気良く返事をしておくれとにする。

「はい、せりせて戴きます！」

「……わかった！ では今日から早速やつてもうおつかの？ 指導教員のしづな先生を紹介しよう。・・・しづな君」

「はい」

呼ばれた女性教員の胸の谷間に顔を埋めるネギがいた。

「あい、『めんなさ』。ようしへねネギ君、アルク君」

「あ、はい・・・」

「よのしへお願ひします、しづな先生。あとネギはせりと遇きなさい。失礼ですよ？」

「う、うん。『めんなさ』しづな先生。」

やはり、こういった事に関しては聞き入れてくれる・・・魔法関係についてはどうすればよいのだろうか。

「わからないことがあつたら彼女に聞くといい。やつやつ、もつ・・・」のか、アスナちゃんしばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？ アルク君は放課後にまたここに着とくれ。そ

の時に話すから・・・「

そんな『ぬりじひょん』の言葉に

「げ

「え・・・」「

「ええよ」

「ええ、わかりました。学園長。」「

上からアスナ、ネギ、このか、俺の順で答えた。

「もうつせんな何か句まで学園長一つ。」

「かわえーよ」のナ

「ガキはキライなんだってばー。」

「仲良くしなさい

学園長のその一言で場は治まり、俺たちが担当する2・Aの教室へと向かうことになったのである。

ちなみに俺が担任で、ネギが担任補佐をすることになったている。

この采配は魔法学校の成績から鑑みて、魔法使いとして優秀になるであろうネギに魔法使いとしての修行の時間が多く取れるようになりますの手段の一つであると考えられる。

こうなる事を予想して、ネギの得意属性魔法を実技で用いて評価を下げるおいたのである。

英雄信仰の蔓延る魔法世界の膝元のよつなものである魔法学校では回復呪文についても授業はしていたが、派手な攻撃魔法を教えたがる先生や、知りたがる生徒が多くた。

こういった武断主義的な人物が多い中で実技のテストをすればどういった結果になるであろうか？

答えはネギのよつな制御が多少甘くとも、派手で威力も高い魔法を使える生徒ほど評価が高くなるのである。

では、得意属性でもない魔法を使っていた俺はどうなるかといつと、他の生徒に比べれば遙かに高い水準の魔法行使することができるが、ネギと同じ魔法で制御もそれほど出来ていないし威力も低いのでネギの次の成績になるのである。

魔法学校の先生の目は節穴か？と言つ人もいるかもしぬないが、どう考へても節穴である。

むしろ、これほど節穴でなければ俺の使つた魔法が得意属性ではないことに気付かれてしまつっていたかもしれない。

そのおかげで、この結果を得られたのは上々であろう。

「ねえ・・・アルク？僕のほつが成績いいのに、どうして担任補佐なのかな？」

「ネギと私の座学は同じくらいだつたろう? それでいて実技はネギの方が優秀だつた、それなら実技の練習も多く取れるよう仕事の少ない役割をくれたのかもしれないよ?」

「そりなんだ・・・そしたら、アルクはあんまりまゝ・・・練習できないつてことなの?」

「そりかもしれないね。」

そう返してやると、何故か嬉しそうにしていた。

大方、『立派な魔法使い』に早く近づける等と考えているのもうが、それは定かではなかつた。

ちなみに、この会話を聞いたアスナとこのかはネギの方が成績が優秀であるということに驚いていたため、ネギが言い出しかけたまゝ・・・という言葉には気づいていそうになかつたのである。

2歩目～日本・麻帆良学園都市・麻帆良中等部を歩く（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

1歩目のように書けているか不安です。

会話についてもコピペが多くるので、ネギのいない時のオリジナ
ルストーリー時になんとか出来ればいいかな?と思っています。

設定小話2タイトルの由来

最初は『英雄の息子達』～双子の兄でもネギじゃない～というタイ
トルでしたが、主人公の名前がアルクになったことと、転生した主
人公が『魔法先生ネギま!』のストーリーの流れに沿いながら、話
を進めて行くことから、道を歩く（進める）と言う意味合いを掛け
て『双子の兄が歩く道～ネギま～』というタイトルにしました。
要するにギャグです。

寒い・・・

感想・アドバイスありましたら是非。

誤字脱字はチェックしている心算になりやすいので教えていただけ
ると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6336z/>

双子の兄が歩く道～ネギま！～

2011年12月21日17時49分発行